

2023. 2. 12 (日) 使徒7:9~16

7:9 族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売りとばしました。しかし、神は彼とともにおられ、

7:10 あらゆる苦難から彼を救い出し、エジプト王ファラオの前で恵みと知恵を与えられたので、ファラオは彼をエジプトと王の全家を治める高官に任じました。

7:11 すると、エジプトとカナンの全地に飢饉が起こり、大きな苦難が襲って来たので、私たちの父祖たちは食べ物を手に入れることができなくなりました。

7:12 しかし、ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まず私たちの父祖たちを遣わしました。

7:13 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分のことを打ち明け、ヨセフの家族のことがファラオに明らかになりました。

7:14 そこで、ヨセフは人を遣わして、自分の父ヤコブと七十五人の親族全員を呼び寄せました。

7:15 こうして、ヤコブはエジプトに下り、そこで彼も私たちの父祖たちも死にました。

7:16 彼らはシェケムに運ばれ、かつてアブラハムがいくらかの銀でシェケムのハモルの子らから買っておいだ墓に、葬られました。

<説教>

「ステパノという人物はモーセと神を冒瀆している。神の神殿とモーセの律法に逆らっている。」これが、ステパノを捕まえ、最高法院で有罪にしようと裁判をしたユダヤ人たちの訴えたことでした。

その訴えを受けて大祭司（裁判長）は「そのとおりののか」とステパノに尋問しました(7:1)。ステパノはその時も聖霊と信仰と恵みと知恵に満たされて、自分を訴えている人々に語り始めました。「兄弟ならびに父である皆さん、聞いてください。」と(7:2)。「そのとおりでない。」と言うのです。自分たち、イエスをキリストと信じる者たち、キリスト教会こそ、〈栄光の神〉(2)を信じ、神に栄光を帰し、モーセを重んじ、モーセの律法（正確には神がモーセを通してお語りになりお与えになった神の律法ですが）を守っているのだ、ということをはっきりと主張しようとした。

そして反対に、自分を訴え捕らえ裁判にかけているあなたがたユダヤ人たちがこそは神に逆らい、モーセの律法にも逆らっているとやがて言うのです。後に「あなたがたの先祖たちが逆らったように、あなたがたもそうしているのです。」と言い(7:51)、「あなたがたは…律法を受けたのに、それを守らなかったのです。」とステパノは言います(7:53)。また、神がお遣わしになった預言者たちをあなたがたの先祖たちが迫害したように、あなたがたも神がキリストとしてお遣わしになったイエスを迫害し、殺したと言うのです(7:52)。もちろん、ステパノは、そう言うことによって、彼らが悔い改めてイエスをキリストと信じるようになることを願っていたに違いありません。

さてそういうわけで、ステパノは、ユダヤ人たちが「信仰の父」と認め、誇っていたアブラハムのことから始めて、自分たちはアブラハムの「信仰の従順」に倣い、歴史の支配者、主権者なる神と神の約束を信じ、従っていることを、また神が与えてくださった希望

に生き、神を礼拝し、神に栄光を帰していることから語り証しし始めました。

アブラハムを選び、お召しになった神は、約束を受け継ぐ約束の子イサクを与えてくださいました。そして〈イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長たちを生まれました〉(7:8)。神がヤコブに与えてくださった十二人の子のことは創世記に詳しく書かれていますが、ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ゼブルン、イッサカル、ダン、ガド、アシエル、ナフタリ、ヨセフ、ベニヤミンです。

本日の聖書は、〈族長たちはヨセフをねたんで、彼をエジプトに売りとばしました。〉(7:9a)と始まります。そのことは創世記 37 章に記されています。ここで言う〈族長〉とは末っ子のベニヤミン(と当然ヨセフも)を除く 10 人のことです。ステパノの説教では、ここで初めてユダヤ人、イスラエルの民の罪が指摘されました(アブラハムについては神に従順だったことしか示していませんでした)。〈族長たちはヨセフをねたん〉だこと、そして〈彼をエジプトに売りとばし〉たことです。なお、それはまるで最高法院がイエスをねたんで総督ピラトに引き渡した(マタイ 27:18)のと同じようです。またヨセフをエジプトに売りとばしたことは、イスカリオテのユダがイエスを売った(マタイ 27:3)のと同じようです(そのユダから金を受け取った最高法院も同罪でした)。さっきも申しましたように、後でステパノはユダヤ人たちの罪をはっきりと指摘しますが、彼はもうここで既に彼らの罪を暗示しているようでもあります。「あなたがたも、イエスに対することで、神に逆らうという先祖たちと同じ罪を繰り返したのだ」と。また「今、私を捕らえ、有罪にしようとしていることにおいて、やはり神に逆らう罪を先祖たちと同じように繰り返し犯しているのだ」とも。

「しかし」とステパノは続けます。〈しかし、神は彼とともにおられ、あらゆる苦難から彼を救い出し、エジプト王ファラオの前で恵みと知恵を与えられたので、ファラオは彼をエジプトと王の全家を治める高官に任じました。〉(7:9b-10)と。ここにはアブラハムに対してなされたのと同じ神の主権的な、神が「主語」の、神のみこころによる神のみわざのことが言われています。〈神は彼とともにおられ、あらゆる苦難から彼を救い出し、エジプト王ファラオの前で恵みと知恵を与えられましたので、ファラオは彼をエジプトと王の全家を治める高官に任じました。〉最後の〈任じました〉さえ、原典では主語が「彼は」なので、初めから一気に読み下せばこの「彼」とは神のことだととることも可能なようです。事実ヨセフが「神は私を、…エジプト全土の統治者とされました。」と告白しました(創世記 45:8)。こうしてステパノは神が歴史の中で、現実の主権者として権威をもって働いておられることをなおも力説し、神に栄光を帰するのです。

「ヨセフ物語」は〈エジプトとカナンの全地に飢饉が起り、大きな苦難が襲って来た〉こととその顛末(てんまつ)へと続きます(11-14)(創世記 41:53-46:34)。そもそもヨセフが〈エジプトと王の全家を治める高官に任じ〉られたのは〈エジプトとカナンの全地に飢饉が起り、大きな苦難が襲って来〉ることをヨセフが神の〈恵みと知恵〉によってファラオに解き明かしたからでした(創世記 41:1-49)。そしてこの出来事は、ヨセフ自身がやはり告白しているように、神の民に対する神の救いのみわざの現れでした。「神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。」(創世記 45:5b)「神が私をあなたがたより先にお遣わしになったのは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによって、あなたがたを生き延びさせるためだったので

す。ですから、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。神は私を、ファラオには父とし、その全家には主人とし、またエジプト全土の統治者とされました。」(45:7-8)。それは単なる「大どんでん返し」「禍を転じて福となす」お話しではありません。困難、苦難の中でも神の民が減びることのないように神がともにおられ、神が救ってくださるという歴史的事実です。そしてヨセフがそうだったように、神がイエス・キリストをこの地上にお遣わしになって、イエスの十字架によって私たちの救いの道を備えてくださったことをやはり暗示しているのです。更にはステパノ自身も自分をヨセフに重ね合わせて、イエス・キリストのゆえに、また教会のために苦しみを受ける覚悟をしていたと見ることもできます。

もちろん、彼もあらゆる苦難の中で神がイエス・キリストによって彼とともにおられることをこれっぽちも疑ってはいませんでした。そして、たとえ殺されたとしても、イエスが復活させられたように自分のイエスの復活にあずかって復活させられるという信仰に満ちていたに違いありません。アブラハム、イサク、ヤコブたちが約束の地を与えられ、約束の地を以て死んだとしても、約束の地に葬られることを命じたのは(15-16)、やがて彼の地で復活させられて、神の約束が自分にも実現することを信じていたからだと考えられます。ステパノは更にはっきりと復活信仰によって、死も人も恐れず、イエス・キリストに信頼して語り続けました。